

総会抄録

第34回千葉医学会総会講演要旨

昭和32年11月16日 千葉大学医学部附属病院屋階大講堂

1. アルギニンの定量法

渡辺剛夫(医化学)

アルギニンの比色定量は坂口のヒポブロミット法に基づくものが多い。この法では急に極大値に達する呈色が過剰のヒポブロミットにより速かに褪色するから、過剰ヒポブロミットを消失させるために尿素液を添加するが、尿素液添加までの時間が極めて短時間であり、かつ正確なるを要する。試薬の量と尿素添加時間に関し種々の変法がある所以である。演者はズルフォサリチル酸を予め検液に加えておくと、過剰のヒポブロミットがこれに反応し、甚だ安定な呈色をするを認めた。この原理による定量法はズルフォサリチル酸が除蛋白剤として用いられるから、甚だ実際的である。呈色度は高く、またアルギニン量に比例する。

2. 大腸菌属の histidine decarboxylase activityについて

皆川 勝, 飯田宏美,
相機和嘉(腐研)

大腸菌属の中にヒスチジンを脱炭酸してヒスタミンを産生する菌株が若干存在していることは古くから知られている。演者らは非病原細菌のうちヒスタミンを大量に産生する細菌の蒐集を行つてゐるが、分離された大腸菌属の中でヒスタミン産生株はある特定の生物性状を有する菌株群に多いことを知つた。これらの菌株は Imvic が +, +, -, + の型式を示し、弱い Urease activity を示すものが多かつた。これらの菌について paperchromatography, Warburg 檢査法等によつて histidine decarboxylase を調べた成績について述べる。

3. 抗M, 抗N 血清の性状について

木村 康(法医学)

抗M, 抗N 血清の作製並びに抗血清の性状に関して知見を得たので報告する。

1) 吸收済抗血清は長時日保存した場合、非特異的凝集反応が現われることがある。これには吸收の

不完全か又は抗血清の変性と云うことが考えられる。偶々米国製の抗血清にこの非特異的凝集反応が見られたのでこれを分析追及したところ、吸収が充分でない場合は時を経て、残つていた或る種の不完全抗体が活性になつたもの様に考えられた。

2) 蛋白分解酵素によつて処理した赤血球を使用して不完全抗体を証明する方法がある。しかし乍ら、MN 式の血液型物質は酵素によつて分解破壊されると云う報告がある(黒田, 1954)。余もこのことについて実験し、酵素処理血球で抗血清を吸収したところ、抗 M, 抗 N 抗体は吸収されないが他の抗体は吸収される事が判明した。これを応用して抗血清を作製したところ、非特異的凝集の見られない耐時性のある抗血清を得ることが出来た。

4. 大平肺吸虫 (Paragonimus ohirai Miyazaki, 1939) の新第1中間宿主「ウスイロオカチグサ」(Paludinella devillis Gould) の発見について

横川宗雄, 吉村裕之, 小山千万樹,
佐野基人, 津田守道, 辻守 康(医動物学)

大平肺吸虫の発育史の中で、その第2中間宿主から終宿主に至る発育に関しては詳細な研究が報告されているが、一方その第1中間宿主は今尚決定されたとは云い難い。即ち扇田, 池田等によつて本種肺吸虫が実験的には「カワザンショウガイ」(Assiminea japonica) に感染し発育が認められてはいるが自然感染は未だ見出されていない。演者等は今夏、大平肺吸虫の流行地として先に報告した南伊豆地方の第1中間宿主の調査を行つたところ、下田町吉佐美及び南伊豆町湊に棲息する「ウスイロオカチグサ」が本種肺吸虫の自然第1中間宿主である事を発見した。猶又当地域には「ウスイロオカチグサ」と「カワザンショウガイ」との2種が混在して棲息している事も明らかとなつた。今日迄の所前者 6082 個、後者 1,4167 個を調べた結果は「ウスイロオカチグサ」に 4 個の自然感染例を発見したが「カワザンショウガイ」には全く認められなかつた事は甚だ興味ある点であ